

<復習>

文化相対主義の次のような定式化を考えてきました。

(1) すべての文化は、価値に関して、平等である。

これは、「平等」という価値判断になっているので、自己論駁的である。

(2) すべての文化は、価値に関して、他の文化と比較できない。

これは、仮に事実と価値を区別して事実判断であるとしても、認識的価値を前提するので、自己論駁的である。それゆえにグローバルな文化相対主義は成り立たない。普遍的な認識的価値の共有を認めたいうえで、ローカルな文化相対主義を次のように考えた。

(3) 「各文化に固有の特殊な価値概念や価値判断に関しては、その優劣を比較できない」
(文化相対主義のテーゼ)

ここで、前回次のような困難を指摘した。文化的価値判断を

文化Aでは、普遍的価値判断(a, b)と特殊な価値判断(m, n)に区別する。

文化Bでも、普遍的価値判断(a, c)と特殊な価値判断(s, t)に区別する。

文化Aの人は、aとbを文化Bの人と共有している、あるいは共有すべきだと考えているが、文化Bの人は、aとcを文化Aの人と共有している、あるいは共有すべきだと考えている。上記の(3)では、このようなコンフリクトの解決には不十分である。このコンフリクトを解消するには、何が文化横断的な普遍的な価値判断であるか、についての理解を共有する必要がある。

特殊な価値判断については、優劣を比較できるか、できないか、が問題ではない。特殊な価値判断がコンフリクトを引き起こさないのは、それを自文化だけに妥当する判断だと考えているからであって、他の文化の特殊な価値判断と比較できないと考えているからではない。

<ミニレポート課題>

では、文化相対主義のテーゼ(3)をどのように書き換えたらいいでしょうか。

学生からの回答

「ある文化に属する者は他の文化に対して口出しすることはできない」

「すべての文化は、当該文化内の価値判断・認識について他の文化と比較できない」

「何が文化横断的かという規定はできないが、文化間での優劣の判断は不必要である」

「普遍的価値判断については文化同士の重なり合う価値判断を普遍的な価値判断として、特殊な価値判断は自文化のみに当てはまるものとする」

「各文化に共通する普遍的価値判断以外の価値判断は、その優劣を比較できない」

「各文化に固有の特殊な価値概念や価値判断に関してはその優劣を比較できない。ただし、議論された結果、合意を得られなかった価値はすべて特殊なものだ」

「文化間のコンフリクトは、優劣をつけようとするとうるさいものになるが、ただ存在をみとめる姿勢をとれば、コンフリクトの解決にも近づくのではないだろうか」

「可謬主義を採用しないと、文化相対主義を擁護することは難しい。」

「各文化の価値概念は、異文化との接触を通じて、比較不可能な特殊な価値概念となる」

「各文化に固有の特殊な価値概念や価値判断に関しては、その優劣を比較することは不可能であるが、共通する部分や異なる部分を見つけることができる」

「認識者Xは、各文化に固有の特殊な価値概念や判断に関して、他の判断を明確かつ完全に言及できたのかどうか知りえない」

私の暫定的な修正案

(4) 「各文化に固有の特殊な価値概念や価値判断に関しては、各文化共同体の中でだけ妥当させ、他の文化共同体には妥当させない」

改良点は、「比較できない」かどうかを問わず、「単に自文化共同体の中だけで妥当させ、他文化共同体には妥当させない」とした点である。

他の案1：「文化の内容が普遍的であろうと特殊であろうと、全ての文化は、各文化共同体の中だけでそれを妥当させ、他の文化共同体には妥当させない」

しかし、この案1の普遍性が認められなければ、案1は自己矛盾する。なぜなら、文化Aの人が文化Aを文化Bの人に押し付けてくるとき、文化Bの人が④を主張しても、Aの人はそれは文化Bの価値観ですというだろうからである。ゆえに、グローバルな文化相対主義は不可能である。ローカルな文化相対主義にとどまるためには、共有できる規範の想定が不可欠である。

共有できる規範が、存在しなければ、コンフリクトは避けられない。では、その共有する規範は、どのようにして共有する規範として社会的に構築されるのだろうか。

(1)それぞれの共同体が人間共同体として営まれていたから、それらの文化に重なり合う部分が全くないということは、考えにくい。その重なり合う部分を取り出して、(その部分についての、正当化の仕方は文化によって異なるとしても、それは問わないで)、それを共通の規範として共有することが可能である。

(2)ただしそれでも文化の違いはあり、その違いに関して、一方が普遍性の主張を譲らない可能性はある。この論争は、どのようなものになるだろうか。

Aがある規範の普遍的妥当性を主張し、Bがそれを批判するとしよう。ここでは、翻訳や異文化理解の可能性が問題になるだろう。

しばしばあることだが、この論争に決着がつかなくなったとしよう。そのとき、普遍性を主張している側が、普遍性の主張を留保してくれるのならば、暫定的な解決になる。しかし、必ずしもそうならない。

イスラムの女性差別に対して、欧米社会が人権の普遍性の主張を留保すべきだろうか。理論の上では、その主張を留保することはできないし、その必要もないだろう。留保すべきなのは、人権の普遍性を強制することである。つまり、経済制裁したり、戦争したりすることである。

<ミニレポート課題>

こういうことになるでしょうか。それともどこかおかしいでしょうか。

これについての、皆さんの意見を書いてください。他の事例を取りあげても結構です。

§ 4 文化相対主義と宗教の位置づけの変化

1 第二次世界大戦後における哲学の相対主義への傾向

#参照

- ・ W. v. O. Quine(1908-2000) は論文「経験主義の二つのドグマ」(『論理的観点から』1953)によって、分析的な真理と総合的な真理の区別が出来ないことを論証し、論文「何が存在するか」(『論理的観点から』1953)や「存在論的相対性」(in *Ontological Relativity and Other Essays*, 1968)において、何が存在するかは、言語に相対的であると主張した。

- ・ T. Kuhn(1922-1996)は「パラダイムの共約不可能性」（『科学革命の構造』1962）を主張し、異なるパラダイム間の優劣をつけられないことを論証した。
- ・ H. Albert(1921-)は、「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」（『批判的理性論考』1968）を指摘して、知の究極的な基礎付けが不可能であることを論証した。根拠を求め続けると、次のいずれかになる。
 - ・ 無限背進
 - ・ 循環論証
 - ・ 独断主義 dogmatism
 しかしどれも根拠づけにはならない。

多元主義、相対主義へ

根拠づけが不可能であるとしても、何らかの信念や立場を採用せざるをえない。

- ・ 決断主義 decisionism
- ・ 規約主義/慣習主義 conventionalism
- ・ 超越論的論証による根拠づけ

多くは、可謬主義(fallibilism)を採用することになる。対立する主張と論争はするが、決着がつかないときには、互いに尊重しあう必要性を認めることになる。

近代的な学問の理念型であった「公理体系」は次のアポリアを抱えることになった。

- ・ 公理設定のアポリア（ミュンヒハウゼンのトリレンマからの帰結）
- ・ 推論規則の適用のアポリア（規約主義のパラドクス、ルイス・キャロル、ウィトゲンシュタイン、クワイン）
- ・ 理論体系の真理性のアポリア（ゲーデルの不完全性定理からの帰結）

経験論の4つのドグマへの批判

第一のドグマ（分析的真理と総合的真理の区別）への批判（クワイン「経験論の二つのドグマ」）

第二のドグマ（要素主義意味論、検証主義）への批判（意味の全体論）（クワイン、同上）

第三のドグマ（概念枠と内容の区別）への批判（デイヴィドソン「概念枠という考えそのものについて」（『真理と解釈』1984））

第四のドグマ（事実と価値の二分法）への批判（パトナム『事実/価値二分法の崩壊』2002）

西洋の文化や文明は普遍性をもたない。

M. Weber(1864-1920) は、『宗教社会学論文集』「序言」(1921)の冒頭で次のように述べている。

「普遍的な意味と普遍的な妥当性をもった発展過程を辿るような文化現象は、ほかならぬ西欧社会に、しかも西欧社会のみに起こったことである、と少なくともわれわれは考えるのだが、これはいったいどういう諸事情が重なったためにそうなったことなのであろうか。」

Weberにとっては、西欧文化が普遍性をもつことはおそらく自明のことであった。そして、それは第二次大戦後まで続いたように思われる。それが自明のことでなくなったのは、20世紀の後半から、1960年ころからであるかもしれない。これは、コロニアリズムの終焉、第二次世界大戦後の植民地の独立運動と一致している。「西欧文化の普遍性」は植民地主義のイデオロギーであったことを示している。もはやそのイデオロギーは不要になった。

こうしていまや次のような考えが主流になっている。＜文化（学問や芸術や道徳や生活様式など）については、我々は理論的に優劣を付けることが出来ない。その意味で、普遍性を主張しうる文化は存在しない。西欧文化も普遍性をもたない。＞ ここから帰結するのは、＜文化に関する多元主義（多文化主義）、文化相対主義をみとめ、自文化中心主義をすてて、異文化を尊重するべきである＞という態度である。ただし、この態度そのものが普遍性を持つことを主張することになる。

2 近代哲学における宗教批判

宗教の争いに対して、哲学が言うべきことは、宗教は理論的に間違っているし、倫理的にも間違っている、ということである。

a 理論的な宗教批判

Kant (1724-1804)による神の存在証明の批判（『純粋理性批判』（1781））

自然神学的証明

宇宙論的証明

存在論的証明

b 倫理的な宗教批判

Marx (1818-1883), 「宗教は民衆のアヘンである」（『ヘーゲル法哲学批判序説』1843）

「マルクスは26歳のとき、論文『[ヘーゲル法哲学批判序論](#)』のなかで次のように述べている。
「宗教的悲慘は現実的悲慘の表現でもあれば現実的悲慘にたいする抗議でもある。宗教は追いつめられた者の溜息であり、非情な世界の情であるとともに、霊なき状態の霊でもある。それは人民の[阿片](#)（アヘン）である。人民の幻想的幸福としての宗教を廃棄することは人民の現実的幸福を要求することである。彼らの状態に関するもろもろの幻想の廃棄を要求することは、それらの幻想を必要とするような状態の廃棄を要求することである。かくて宗教の批判は、宗教を後光にもつ憂き世の批判の萌しである」

この文章は、ドイツの詩人でマルクスの親友でもある[ハインリッヒ・ハイネ](#)の1840年の著作『Ludwig Borne iv (ルートヴィヒ・ベルネ)』中の「宗教は救いのない、苦しむ人々のための、精神的な阿片である」を念頭において書いたものと思われる。」（「マルクス」 in Wikipedia）

Freud (1856-1939)：宗教は「幻想」である。（『幻想の未来』1927）

Nietzsche (1844-1900)：ユダヤ教・キリスト教は「奴隷道徳」である。（『道徳の起源』1886）

c 意味論的宗教批判：論理実証主義の宗教批判（近代的宗教批判の最終形態）

論理実証主義者は、宗教や形而上学や道徳の命題は、検証不可能であり、無意味であると主張した。

3 ポスト近代の宗教論

論理実証主義の破綻により、このような理解は変化することになる。科学的主張も、宗教の主張も、究極的な根拠づけができない点において、また経験的な検証ができない点において同じである。科学的言明と非科学的言明の間に理論的線引きができなくなった。宗教や道徳は、有意味だとみなされるようになり、さらに真理値を持つと考える者も登場するようになる。

#リベラリズムによる宗教の扱い

・異なる考えを持つ人々が共生するためには、互いの自由を尊重するために最低限必要な自由の制約を共生のためのルールとして尊重する必要がある。宗教や道徳は、互いに個人の自由な選択にゆだねる。

・共生のための普遍的な規則（正義）と、個々人にゆだねられる生き方や宗教や道徳（善構想）を区別すること。「正義」の「善」に対する優位を主張する。

#リベラリズムに対する共同体論からの批判

- ・リベラリズムが想定する「負荷なき自己」は存在しない。私たちは、「状況に組み込まれた自己」である。（共同体論は、おそらくカントの理性の公的使用/私的使用の区別への批判に向かうだろう。）
- ・共同体論者は、共同体に組み込まれた自己、共同体に共有された価値観、宗教を尊重しようとする。（テイラー、サンデル、宮台真司（ビデオニュースドットコム））

#以上からの帰結

ハーバーマス、テイラー、バトラー、ウェスト『公共圏に挑戦する宗教』岩波書店では、リベラリスト、ハーバーマスと、共同体論者テイラーはともに、宗教をもちや個人の選択にゆだねられる私的な事柄とみなすのではなくて、公共の場で議論する必要性を認める。なぜなら、宗教が私的な領域にとどまらず、公共圏に挑戦しているからである。

宗教が私的な領域にとどまらずに、公共圏に進出する理由は、人々は、信仰において連帯を求めるからである。なぜだろうか？（オタクもまた連帯を求める。）

注1 言語的相対主義

20世紀の相対主義は、言語的な相対主義である。クワインによる分析/総合の区別批判は、意味論的規則による真理と、意味論的規則プラス経験による真理の区別への批判であり、意味論的規則を定義できないからその区別ができないという批判である。（同一性、必然性、定義、意味論的規則の定義の不可能性の指摘からの帰結である。これらが不可能であるのは、なぜ？クワインは、分析/総合を批判して、それができないというが、言語を超えた仕方ではできないということである。つまり、その区別は言語に相対的だという主張としてもよめる。）

・Robert Brandomは、形式的推論を、論理的な語彙に関する実質的推論であるという。彼は、その実質的推論の正しさを社会的なサンクションで説明する。それには、ゲリマンダリング問題が生じる。その問題を、ブランダムは、自文化中心主義で、解消する。

- ・他のドグマも、言語的相対主義と関連している。